

2018年度 自己評価・学校関係者評価報告書

2019年3月

学校法人亀ヶ谷学園

幼保連携型認定こども園・宮前おひさまこども園

① 園の教育目標

- ・わくわく生き活きと輝き創造的にあそべる子ども
 - ・わくわく人が好きになり、人に好かれ、思いやれる子ども
 - ・わくわく響関の言葉が言え、秩序が気持ち良いとかんじられる子ども
- わくわく響き合える豊かなところをもった子ども

② 本年度に定めた重点目標

認定こども園移行初年度であることも踏まえ、以下の3つを重点目標として定めた。

- ・子どもたちの主体的なあそびや生活の実現
- ・園内研修を通して課題解決を図り、保育の質を高め、保育者の専門性を深める。
- ・歳児別の目標
 - 幼児：おひさまこども園の環境（少人数・異年齢の自然なかかわり等）を生かした保育実践
 - 乳児：安全と養護を最優先課題として実践・研修を通して教育としての乳児保育の深める

③ 具体的評価項目の達成及び取り組み状況

項目	評価	取り組み状況
教育目標	A	園の教育目標については全ての職員が共感・理解し、日々の保育実践を通して実現できるよう努力して取り組んでいる。
保育計画	A	子どもの興味・関心から計画を立案できるように配慮している。 幼児は、子どもたちの興味・関心が高いあそびをウェブマッピングの方法でより遊びが豊かになるような環境を考えたり、乳児は年度途中から可視化した記録への取り組みを始めたし、子どもの実態に即した計画を立案できるように取り組んでいる。
保育環境	B	初めての園舎・園庭を子どもたちの経験が豊かになるよう、職員間で意見を出し合い活用方法を考えてきた。 異年齢のかかわりでは玄関ホールが全園児が繋がる場として有効に活用された。海のショーごっこやファッションショーなど子どもたちの主体的なあそびが異年齢のかかわりを生み、子どもたちの大きな刺激となっていたように感じる。

安全への配慮	A	<p>乳児保育については、法人として初めての取り組みということで、養護と安全について特に注意深く保育をしてきた。</p> <p>幼児以上に関しては、リスクとハザードの観点から、子どもたちが挑戦できる環境を残しながら、ハザードは限りなく0に近づける環境を目指している。子どもたちが挑戦できる環境や、その中で育ちについて、川崎市看護師部会の看護師さんや公立保育園園長先生が視察に来られ意見を交わす機会もあった。</p>
チーム保育・同僚性	A	<p>年齢・経験年数が異なる幅広い保育者集団の中で、それぞれが尊敬の念を持ちながら接することを大切にしていきたい。業務上の課題については、建設的な話し合いを通しての解決を目指している。</p> <p>同僚性向上のために、大学教授に定期的に園内研修を実施していただき、法人としての重要課題として取り組んでいる。その取り組みの成果もあり今年度の退職者は0名であった。(全職員67名)</p>
保育内容・方法	A	<p>一人ひとりを大切にしたい保育実践を職員の目標としている。子どもたちのケンカやトラブルの場面も育ちのための一場面と捉え、教育的な意図をしっかりと持って対応していけるようにしていきたい。</p>
乳児保育	B	<p>緩やかな担当制の中、一人ひとりの生活リズムに沿った生活の実現を目指している。保育者の連携やシフトの工夫など来年度以降もより良い方法を探っていきたい。</p>
保護者とのかかわり	A	<p>ポートフォリオや写真等、可視化された記録を用いながら子どもの育ちを伝える文化が根付きはじめている。子ども真ん中に、園と保護者が手を取り合っって子どもの育ちにかかわる関係性を築いていきたい。</p>
職務の遂行	A	<p>それぞれ自分の役割を自覚し、責任を持って業務にあたっている。</p>
専門性の向上	A	<p>年度始めは宮前区役所の地域支援担当の方や看護師さんに安全についての研修を実施したり、適宜助言を求めたりするなど、行政とも連携しながら安全を確保できるように努めてきた。</p>
食育	B	<p>給食調理委託会社ミールケアが行う秋刀魚の炭焼きやクッキー作りなどの食育活動に対し、意欲的に取り組んでいた。</p> <p>自分たちで野菜を栽培・収穫するといった経験が少なかった。</p>
子育て支援	B	<p>園庭開放あおぞら広場では、平均20組以上の未就園児親子が来園し、園庭でのあそびを楽しんでいた。</p> <p>すくすく広場では登録者数も多く、予約が取りづらい状況が続いてしまったことが課題である。</p>
地域との連携	B	<p>認定こども園へ移行したことにより、これまで以上に川崎市や宮前区といった行政とのつながりが深まった。</p> <p>子どもたちが地域に出かけたり、地域資源を生かした活動が十分に行えなかった。</p>

④ 総合的な評価結果

A	幼保連携型認定こども園としてはスタートの年であったが、これまで積み上げてきた幼児教育の実践や知見を生かし、子ども主体の生活やあそびの実現に向けて、職員一同力を合わせて取り組むことができた。 2月頃に行われた川崎市における監査においても、指摘事項はなく、健全な運営が行われている一定の評価を得ることができた。
---	--

評価

A：十分達成されている

B：達成されている

C：取り組まれているが、成果が不十分でない

D：取り組みが不十分である

⑤ 今後取り組むべき課題

保育環境	幼保連携型認定こども園の特徴でもある、在園時間が異なる子どもたちへの配慮も含め、子どもたちの園生活を見直し、よりよい生活となるように工夫していきたい。
食育活動	園児用の畑の移転年のため、秋のさつまいもほりが経験できなかった。 来年度はホール横に miyamaefarm が使用可能になる予定である。これまで以上に食育活動を行いやすい環境となるため、子どもたちとの対話を通ながら豊かな食育活動を行っていきたい。
乳児保育	法人として0、1、2歳児を受け入れるのが初めてであった。 外部の研修会の参加や、園内での乳児保育の質を高めるための園内研修など継続しながら行っていきたい。

⑥ 施設関係者評価（自己評価の結果を踏まえて実施）

これまでの幼稚園としての歴史があり、保育内容が充実していて、新設の園であったが安心して通わせることができた。子どもたちが普段の生活はもちろん、行事なども意欲的に取り組みとても楽しそうなのが感じ取れる。

施設が新しくなったのに伴い、先生が部屋の使い方を含めてさまざまに工夫されているのを感じられた。

保護者同士の交流についても1号認定・2、3号認定と家庭状況やお迎え時間が異なる家庭が多いこともあり、交流がなかなか持てなかったが学期に1回保護者会があることで顔を合わせコミュニケーションをとる機会となった。サークル活動の持ち方が宮前幼稚園と異なるため今後保護者の意見も踏まえて改善されると良いのではないかな。

今後も、子どもを中心とした園の運営をしてくださることを期待している。